

422

114

願經四分律古點

陳

國

圖

書

館

藏



始



願經四分律古點

# 願經四分律藏

書名

|      |   |
|------|---|
| 著者   | 姚秦佛陀 耶舍譯  |
| 本數   | 七   |
| 製本   | 黃紙 卷子   |
| 紙    | 卷四 廿四、廿五、廿六、廿七、廿八、廿九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十 |
| 談話   | 御願文 訓点 讀法   |
| 現時所在 | 正倉院内 聖蹟藏  |

一部分寫真

漸漸人間乞食為本主所長舉聲喚言心莫捉我心莫捉我左右諸居士問言何故喚耶報言此人捉我耶問彼人言何故捉耶報言是我家奴諸居士語言汝放去不應捉汝或不能得此人或為官所罰何以故知麼竭王瓶沙先有教令若有能於沙門釋子中出家學道者聽如來法中善備梵行得盡苦際莫有留難其主即放大喚喚志誦我是我奴而不得自由如今沙之沙門釋子盡是奴乘時



第卅四卷三十葉原本八寸六分

概説

此の古寫四分律は奈良正倉院内聖蹟藏の御本にて、聖武天皇の御宇、光明皇后御父藤原不比等御母橘氏の冥福を祈らむが爲り寫さしめられたる所謂、五月一日の願經あり、每卷末左の如き文を記されたり。  
 白后藤原氏光明子奉為 尊考贈正一位大臣府君尊 此贈從一位橘氏太夫人敬寫一切經論及律註嚴說了伏、願憑斯勝因奉資冥助、永庇菩提之樹遊般若、恒進福壽下及家宗共、盡忠節又光明子自發誓言弘濟沉淪勤除煩惱、障妙窟諸法早契菩提、乃至傳燈無窮流布天下、聞名待卷復福消災、一切迷方會歸覺路、  
 天乎十二年五月日記

此の本、本来全部六十卷ありしが、今存するもの廿八卷、其中、傍訓ありもの十卷にして、二卷を点多くして傍訓稀し、一卷は他卷より、真假名多くして、時代稍古しが如く、これに、僅に關卷一二葉に過ぎざるが爲り、編者の研究に加へざるべし、と云ふ。

大正  
12.4.20  
寄贈

願經四分律

○○○○○○○爾時世尊遊羅閱城  
 時摩竭王瓶沙告諸國人言欲於沙門釋子  
 中能出家學道者聽如來法中善修梵行盡  
 諸苦際時有一奴來詣僧伽藍中語比丘言  
 我欲出家作比丘時諸比丘即與出家為道  
 漸漸人間乞食為本主所捉舉聲喚言上莫  
 捉我上莫捉我左右諸居士問言何故喚耶  
 報言此人捉我耶問彼人言何故捉耶報言  
 是我家奴諸居士語言汝放去不應捉汝或  
 不能得此人或為官所罰何以故知摩竭王  
 瓶沙先有教令若有能於沙門釋子中出家  
 學道者聽如來法中善修梵行得盡苦際莫  
 有留難其主即放大喚喚盡諸哉是我奴而  
 不得自由如今放之沙門釋子盡是奴聚時  
 諸比丘以此事往白佛佛言自今已去不得  
 度奴若度者當如法治○○○○○○○

摘

要

二

凡例

一凡古經卷の訓點ありの本文と一手同時代のもの極めて少し  
 殊に此の願經は光明皇后其二親實福の爲りに特よ名あり寫經  
 生せて敬寫せしめられたるものなるが故に當時に在りては  
 訓點なくして讀みかざるべきもの非ず故に此の訓點を多少の歲  
 月を経たる後のものなるべきハ勿論の事と爲す而して今之を  
 校抄せしむるに方り原本の字體を精細に校抄すべし其の事甚だ困  
 難なるが上に何等研究に益するところなり故に之を大體に止

傍訓

責彼比丘云何世尊制戒(一) 餘比丘亦不著繆(一) 病者困篤(一) 將(一) 客比丘須依止者(一) 諸比  
 丘自佛言為失依止不(一) 不得受戒(一) 先飲水小停(一) 撰擇(一) 去(一) 輕躁(一)

教父堅住(一) 此間若有沙門釋子能与我論者來時(一) 有是度(一) 甚奇特(一) 豈得不多也(一)  
 生此念(一) 著袈裟入外道叢中(一) 誦(一) 哉(一) 自由(一) 盡是奴聚(一) 有賊因受獄逃(一)

憂婆離童子即往父母所自言我今欲出家為道願見聽許父母報言我等唯有汝一子心甚愛  
 念乃不欲令死別况當生別憂婆離童子如是再三白父母言願聽我出家父母亦如是報言我  
 等唯有汝一子心甚愛念乃不欲令死別况當生別(一) 莫入我宿處(一) 第二不受(一) 以上第四卷  
 答言如是(一) 欲聞說法(一) 極過差歌詠聲說法佛聞已(一) 若不肯者(一) 坐單坐(一) 佛言

願經四不律古点

一 部の法律有り、即ち釋迦如來弟子等實際の行為につき、親ら見聞せし  
 多論親者の苦、所犯者自ら告白する可なり、一、是非善惡を承定  
 其の輕重に従ひ或は許容し或は禁止し、或は罰責せり、而して當時  
 側に侍りて記したるは、即ち藏律部に於ける大小衆の經論是なり、而し  
 如來在世の時、未だ無量衆生を度脱せしむる爲に、比丘比丘尼の爲に別  
 設けられたるもの無かりしを、入滅百年の後に、八十誦即ち八十卷の上  
 律の存したるより、阿羅漢當無徳といふが、特に比丘比丘尼の爲に、是  
 に關及するものを四次に抄出せしが、即ち此の四分律なり。  
 四分律の漢譯せられたるは、曇無徳の末流方、罽賓國沙門陀那舍より、  
 其の弟子龜茲沙門摩訶什が翻し、其の弟子、後秦主姚興に迎へられ、長安に  
 來り、其の請に應じたるが、その内容第一分、第二分、第三分、第四分、  
 受戒戒度、戒度、法聚、法聚、説戒戒度、第三分、安居戒度、自恣  
 戒度、皮平戒度、衣戒度、藥戒度、説那衣戒度、拘睺羅戒度、賈賈戒度、人  
 戒度、覆藏戒度、遮度、破戒度、減諍戒度、比丘尼戒度、法戒度、第四分、  
 房舍戒度、雜戒度、五百結集法、調部法、毗尼法、法、法、  
 全部を通過せしが、第一分比丘戒、第二分比丘尼戒、第三分僧尼の破戒、即ち現  
 行犯に對し、直ちに之を禁じて、後々戒を許せしむるを、其の第二分受  
 戒以下は、僧道を實行する上について、一々批判し、之を修する方便を示せしむ  
 るが、比丘比丘尼の佛弟子中の新たる發心せしもの、其の動かし  
 らざる罪を犯し易く、之を露すに記せしが、爲に、往々にして口誦す  
 るに堪へざるもの無きにあらざるが、其の間如來の親しく弟子を教導  
 せしむるに斯の如くならむと、其の目前の看しが如き心地を、  
 のあり、同時に其の言動より、如來も亦人類社會或時期に於ける一個  
 の優れたる人間たることを會得するに足るべきなり。  
 此の本文書寫の歲月は、前に擧げた、每卷末の記文にて明かされ、其の  
 訓點に其の時代確かならず、但し成實論天長点を以て、假名の字體並び  
 に傍訓の語體を是と比較するに、後より古體なり、と、争ふ可なり、  
 而して、尚假名の字體をも合考すると、大略是層より弘仁の國  
 のものが多く推測し得べきなり。

唯字體の異同甚しきものに限り、大略原形を示し、將に校本の  
 字體を注せり。

一 凡古經卷傍訓の通例として、常讀のものには、其の字の右側、異訓  
 のりのハ左側、施したるは、其のまゝに抄出たり。  
 一 聖語藏願經四不律は、每卷末、異号を朱記して、匣中に收む、而して原  
 本卷末を大體校本と一致す、が故に、今之に従ふ、乃ち諸卷抄下、每  
 に、卷次下、括弧を施せ、は、其の朱記のものなり、次の如し。  
 四(四七) 卅六(卅八) 卅七(卅八) 卅四(卅五) 卅四(卅五) 卅七(卅八)

摘

要

四

若夜集說法者坐高耳尤在時諸比丘夜集欲坐禪佛言聽時諸比丘睡眠佛言此坐者當覺之若  
 手不相及者當持戶蓋（若佛初覺之若與同意者當持草蓋）擲之若猶故睡眠當持禪杖覺  
 之中有得禪杖覺已呵不受佛言不應尔若呵不受者當如法治（若復睡眠佛言當捫眼若以水洗面時諸比丘猶故復  
 有得水灑者若呵不受亦當如法治）若故復睡眠佛言當捫眼若以水洗面時諸比丘猶故復  
 睡眠佛言當自摘（耳鼻若摩額上若復睡眠當披張帶多羅僧以手摩捫其身若當起出戶外  
 瞻視四方仰觀星宿若星經行度身攝諸根令心不散）得初禪言汝等  
 今日是何日 數日 零落 棧上 堪能 若作破竹聲 若打地聲  
 用 慙憂 屈申解頂 世尊知而尔已不答言尔 出往 如  
 汝等云何 癡和上為上坐 函筒 若壇畔若菌 若垣墻 彼二界共相  
 錯逆 馱流 巖窟 杌樹 達 坐 調其琴彈之 集  
 舉病比丘來 第二不說 以上第六卷  
 坐若誦律若不誦律堪能者應如是 住處追狹 虫爛壞 不拭脚 佛言膝已上

摘

要

五

杖已下不得觀（杖） 體手脚身无苦 受自恣住待日足 今時諸比丘露處安居得風  
 日暴形體黑瘦剥裂往詣佛所頭面礼足却坐一面世尊知而故問汝等何故形體黑瘦剥裂耶  
 鈎鈎 梯 樹通身乾 若樹高過人頭者枝葉足覆陰一坐時 諸比丘在小屋內  
 安居起不闌頭坐趣容膝足郵（水雨） 在樹空中 斫枝 請 見  
 通遼 時有大童女來誘 調比丘汝何不修道我當為汝作婦 第三不  
 若不能勝以手招伴 諸比丘一時自恣肉亂 上坐疲極  
 徐徐 第三不自 恣度以上第六卷  
 析喻 此病差 今日病 具削垢刀  
 自恣日有客比丘來十四日舊比丘十五日 第三不自  
 石上如力士屈伸解頂（項）從彼來更出佛前自言瞻波長者欲見 世尊佛告言汝往屋陰中敷  
 坐我當往坐時婆竭陀即受教敷坐已還到佛所頭面礼足在一面住自世尊言我已敷坐竟今  
 正是時尔時世尊從屋中出坐已告婆竭陀言語瞻波長者未時長者婆竭陀没於佛前如力  
 士屈伸解頂勇出於石上時諸長者見嘆未曾有世尊弟子神足猶尔况復如來 從今已去

頌經四不律古

歸依佛法僧聽為憂婆塞從今已去不煞生乃至不飲酒今時長者子守龍那在會中坐作是念  
 言我聞佛所說「即白世尊言如我聞佛所說」汝父母聽不「若父母不」佛言今正是時守龍  
 那還勝波城至父母所自言如我聞佛所說若我在家與妻子俱不得修清淨行今欲於佛所求  
 除鬚髮捨家為道願父母聽父母報言出家之法甚難為沙門亦不易不如在家樂於愛欲自恣  
 作福不須出家守龍那聞父母如是語猶故不息乃至第二第三六如是守龍那如是三白父母  
 猶故不聽時守龍那即從坐起而坐地作如是言從今已去不洗浴香不塗身不飲不食若或  
 當死者得出家日不食乃至音「守龍那聞父母聽許自念義今歲度如是不堪一食可不自持養時守龍那  
 住父母所自言我今出家去父母言今正是時」且「於兩城中間七處安驛」世尊言  
 我聞汝隨意答我汝在家時能彈琴守龍那云何答若急音  
 聲好不也世尊「初夜後夜景意修行助道之法得羅漢道」比丘心解  
 脫有漏眼「二俱」心得解脫第三十卷 若故不住應與作戶排戶鉤與  
 杖與草蓆與蓋與扇與水瓶與香動與九香與房衣若故不往沙門一切可須者應與  
額經四不律古

今時世尊在繩林中時諸比丘乞食時見有人攜糞牛乳今糞子飲已復攜糞子口中唾沫出與乳  
 相似後遂疑不復飲乳白佛佛言聽飲糞乳法應今時世尊在舍衛國時諸比丘秋月得病顏  
 色憔悴形體枯燥癩白時世尊「若時若非時」今時舍利弗患風醫藥敷服五種脂  
 蘇脂魚脂驢脂脂脂失守摩羅脂白佛佛言聽服時受時瀝時煮如油法服非時受非時瀝非  
 時煮不應服若服如法治「爾時私可見此已恐怖毛豎」心懷恐怖毛豎種種方便  
 說法開化今得歡喜「禮佛而去」著剎尼「濡」得黑石蜜漿  
 不醉人「遂多積聚藏舉」持串著身上「下漏上深」房舍臭穢時「若作穢  
 盛出棄之」置櫃外「墮空木」以筋若毛繩急結之「蓋藏器物」牧牛羊「能使我  
 作何等」自良宜「大災」稱怨「食飲倉庫溢滿」以一犁耕「一七壘  
 出其婦」供養佛及比丘「今時世尊從阿年多羅國人間遊行至阿摩那城」沙門瞿曇  
 有大名稱言是如來无所著應供遍知明行足為善逝世間解无上士調御丈夫天人師佛世  
 尊「為欲大祠耶」佛世尊「作制」第三十卷 以上第四十二卷 三羯磨

額經四不律古

摘

要

衆多白... 汝等好自勉力莫不如他... 意 若上坐若次坐若誦律若不誦律堪能... 曠者住如是白大德僧... 被呵責羯磨人... 呵責者... 或彈鼓... 或作鵝... 或作跋行或哺或作排... 人... 前... 青樓... 以上第四卷... 聞 被 從誰許... 我今背痛小... 自息時... 猶野干偃卧輸... 眠時 即教令舉馬著前... 放箭著樹... 若汝不放箭者... 以鼻拔取藕根... 光澤... 芭蕉以實死... 瘵人傷利養... 時諸比丘作如是念未曾有提婆達多是世尊弟子乃住如是背恩住非法耶... 今時世尊知諸比丘心之所念即告諸比丘提婆達多非但今日破壞我弟子乃至過去世有二閻浮提王一名月二名月益十四日生故名為月十五日生故名為月益彼此同意无有嫌卻... 閻浮提中有一河水名備羅吃其水兩邊各有四万二千城圍土平博嚴好人民財富熾盛飲食豐饒時月益王備羅吃河水邊有城名備羅吃... 有五百死囚從獄得出時... 王自念何須沙門婆羅門住字為此兒生日多有善事現即字為善行洗浴洗濯... 眷屬辭別... 推鈴... 至齋... 推胃... 彼傷兩眼血流汗身東西憚惶行破其瓶... 其女以適... 問破... 和合不諍競... 第二卷 以上第六卷

頌經四律吉點

摘

要

九

字音 龜... 龜... 刑... 若... 懶... 監... 獄官檢校名簿... 姜... 近... 村寺... 鉛... 錫... 棧... 棧... 潘... 苑... 鉛... 白... 錫... 剌... 蘇... 裝... 嚴... 以上第二卷 以上第三卷 以上第四卷 以上第五卷 以上第六卷 以上第七卷 以上第八卷 以上第九卷 以上第十卷 以上第十一卷 以上第十二卷 以上第十三卷 以上第十四卷 以上第十五卷 以上第十六卷 以上第十七卷 以上第十八卷 以上第十九卷 以上第二十卷 以上第二十一卷 以上第二十二卷 以上第二十三卷 以上第二十四卷 以上第二十五卷 以上第二十六卷 以上第二十七卷 以上第二十八卷 以上第二十九卷 以上第三十卷 以上第三十一卷 以上第三十二卷 以上第三十三卷 以上第三十四卷 以上第三十五卷 以上第三十六卷 以上第三十七卷 以上第三十八卷 以上第三十九卷 以上第四十卷 以上第四十一卷 以上第四十二卷 以上第四十三卷 以上第四十四卷 以上第四十五卷 以上第四十六卷 以上第四十七卷 以上第四十八卷 以上第四十九卷 以上第五十卷 以上第五十一卷 以上第五十二卷 以上第五十三卷 以上第五十四卷 以上第五十五卷 以上第五十六卷 以上第五十七卷 以上第五十八卷 以上第五十九卷 以上第六十卷 以上第六十一卷 以上第六十二卷 以上第六十三卷 以上第六十四卷 以上第六十五卷 以上第六十六卷 以上第六十七卷 以上第六十八卷 以上第六十九卷 以上第七十卷 以上第七十一卷 以上第七十二卷 以上第七十三卷 以上第七十四卷 以上第七十五卷 以上第七十六卷 以上第七十七卷 以上第七十八卷 以上第七十九卷 以上第八十卷 以上第八十一卷 以上第八十二卷 以上第八十三卷 以上第八十四卷 以上第八十五卷 以上第八十六卷 以上第八十七卷 以上第八十八卷 以上第八十九卷 以上第九十卷 以上第九十一卷 以上第九十二卷 以上第九十三卷 以上第九十四卷 以上第九十五卷 以上第九十六卷 以上第九十七卷 以上第九十八卷 以上第九十九卷 以上第一百卷

點例 (一) 逃去來至... 覺... (二) 逃去來至... 覺... (三) 逃去來至... 覺... (四) 逃去來至... 覺... (五) 逃去來至... 覺... (六) 逃去來至... 覺... (七) 逃去來至... 覺... (八) 逃去來至... 覺... (九) 逃去來至... 覺... (十) 逃去來至... 覺... (十一) 逃去來至... 覺... (十二) 逃去來至... 覺... (十三) 逃去來至... 覺... (十四) 逃去來至... 覺... (十五) 逃去來至... 覺... (十六) 逃去來至... 覺... (十七) 逃去來至... 覺... (十八) 逃去來至... 覺... (十九) 逃去來至... 覺... (二十) 逃去來至... 覺... (二十一) 逃去來至... 覺... (二十二) 逃去來至... 覺... (二十三) 逃去來至... 覺... (二十四) 逃去來至... 覺... (二十五) 逃去來至... 覺... (二十六) 逃去來至... 覺... (二十七) 逃去來至... 覺... (二十八) 逃去來至... 覺... (二十九) 逃去來至... 覺... (三十) 逃去來至... 覺... (三十一) 逃去來至... 覺... (三十二) 逃去來至... 覺... (三十三) 逃去來至... 覺... (三十四) 逃去來至... 覺... (三十五) 逃去來至... 覺... (三十六) 逃去來至... 覺... (三十七) 逃去來至... 覺... (三十八) 逃去來至... 覺... (三十九) 逃去來至... 覺... (四十) 逃去來至... 覺... (四十一) 逃去來至... 覺... (四十二) 逃去來至... 覺... (四十三) 逃去來至... 覺... (四十四) 逃去來至... 覺... (四十五) 逃去來至... 覺... (四十六) 逃去來至... 覺... (四十七) 逃去來至... 覺... (四十八) 逃去來至... 覺... (四十九) 逃去來至... 覺... (五十) 逃去來至... 覺... (五十一) 逃去來至... 覺... (五十二) 逃去來至... 覺... (五十三) 逃去來至... 覺... (五十四) 逃去來至... 覺... (五十五) 逃去來至... 覺... (五十六) 逃去來至... 覺... (五十七) 逃去來至... 覺... (五十八) 逃去來至... 覺... (五十九) 逃去來至... 覺... (六十) 逃去來至... 覺... (六十一) 逃去來至... 覺... (六十二) 逃去來至... 覺... (六十三) 逃去來至... 覺... (六十四) 逃去來至... 覺... (六十五) 逃去來至... 覺... (六十六) 逃去來至... 覺... (六十七) 逃去來至... 覺... (六十八) 逃去來至... 覺... (六十九) 逃去來至... 覺... (七十) 逃去來至... 覺... (七十一) 逃去來至... 覺... (七十二) 逃去來至... 覺... (七十三) 逃去來至... 覺... (七十四) 逃去來至... 覺... (七十五) 逃去來至... 覺... (七十六) 逃去來至... 覺... (七十七) 逃去來至... 覺... (七十八) 逃去來至... 覺... (七十九) 逃去來至... 覺... (八十) 逃去來至... 覺... (八十一) 逃去來至... 覺... (八十二) 逃去來至... 覺... (八十三) 逃去來至... 覺... (八十四) 逃去來至... 覺... (八十五) 逃去來至... 覺... (八十六) 逃去來至... 覺... (八十七) 逃去來至... 覺... (八十八) 逃去來至... 覺... (八十九) 逃去來至... 覺... (九十) 逃去來至... 覺... (九十一) 逃去來至... 覺... (九十二) 逃去來至... 覺... (九十三) 逃去來至... 覺... (九十四) 逃去來至... 覺... (九十五) 逃去來至... 覺... (九十六) 逃去來至... 覺... (九十七) 逃去來至... 覺... (九十八) 逃去來至... 覺... (九十九) 逃去來至... 覺... (一百) 逃去來至... 覺... (一百零一) 逃去來至... 覺... (一百零二) 逃去來至... 覺... (一百零三) 逃去來至... 覺... (一百零四) 逃去來至... 覺... (一百零五) 逃去來至... 覺... (一百零六) 逃去來至... 覺... (一百零七) 逃去來至... 覺... (一百零八) 逃去來至... 覺... (一百零九) 逃去來至... 覺... (一百一十) 逃去來至... 覺... (一百一十一) 逃去來至... 覺... (一百一十二) 逃去來至... 覺... (一百一十三) 逃去來至... 覺... (一百一十四) 逃去來至... 覺... (一百一十五) 逃去來至... 覺... (一百一十六) 逃去來至... 覺... (一百一十七) 逃去來至... 覺... (一百一十八) 逃去來至... 覺... (一百一十九) 逃去來至... 覺... (一百二十) 逃去來至... 覺... (一百二十一) 逃去來至... 覺... (一百二十二) 逃去來至... 覺... (一百二十三) 逃去來至... 覺... (一百二十四) 逃去來至... 覺... (一百二十五) 逃去來至... 覺... (一百二十六) 逃去來至... 覺... (一百二十七) 逃去來至... 覺... (一百二十八) 逃去來至... 覺... (一百二十九) 逃去來至... 覺... (一百三十) 逃去來至... 覺... (一百三十一) 逃去來至... 覺... (一百三十二) 逃去來至... 覺... (一百三十三) 逃去來至... 覺... (一百三十四) 逃去來至... 覺... (一百三十五) 逃去來至... 覺... (一百三十六) 逃去來至... 覺... (一百三十七) 逃去來至... 覺... (一百三十八) 逃去來至... 覺... (一百三十九) 逃去來至... 覺... (一百四十) 逃去來至... 覺... (一百四十一) 逃去來至... 覺... (一百四十二) 逃去來至... 覺... (一百四十三) 逃去來至... 覺... (一百四十四) 逃去來至... 覺... (一百四十五) 逃去來至... 覺... (一百四十六) 逃去來至... 覺... (一百四十七) 逃去來至... 覺... (一百四十八) 逃去來至... 覺... (一百四十九) 逃去來至... 覺... (一百五十) 逃去來至... 覺... (一百五十一) 逃去來至... 覺... (一百五十二) 逃去來至... 覺... (一百五十三) 逃去來至... 覺... (一百五十四) 逃去來至... 覺... (一百五十五) 逃去來至... 覺... (一百五十六) 逃去來至... 覺... (一百五十七) 逃去來至... 覺... (一百五十八) 逃去來至... 覺... (一百五十九) 逃去來至... 覺... (一百六十) 逃去來至... 覺... (一百六十一) 逃去來至... 覺... (一百六十二) 逃去來至... 覺... (一百六十三) 逃去來至... 覺... (一百六十四) 逃去來至... 覺... (一百六十五) 逃去來至... 覺... (一百六十六) 逃去來至... 覺... (一百六十七) 逃去來至... 覺... (一百六十八) 逃去來至... 覺... (一百六十九) 逃去來至... 覺... (一百七十) 逃去來至... 覺... (一百七十一) 逃去來至... 覺... (一百七十二) 逃去來至... 覺... (一百七十三) 逃去來至... 覺... (一百七十四) 逃去來至... 覺... (一百七十五) 逃去來至... 覺... (一百七十六) 逃去來至... 覺... (一百七十七) 逃去來至... 覺... (一百七十八) 逃去來至... 覺... (一百七十九) 逃去來至... 覺... (一百八十) 逃去來至... 覺... (一百八十一) 逃去來至... 覺... (一百八十二) 逃去來至... 覺... (一百八十三) 逃去來至... 覺... (一百八十四) 逃去來至... 覺... (一百八十五) 逃去來至... 覺... (一百八十六) 逃去來至... 覺... (一百八十七) 逃去來至... 覺... (一百八十八) 逃去來至... 覺... (一百八十九) 逃去來至... 覺... (一百九十) 逃去來至... 覺... (一百九十一) 逃去來至... 覺... (一百九十二) 逃去來至... 覺... (一百九十三) 逃去來至... 覺... (一百九十四) 逃去來至... 覺... (一百九十五) 逃去來至... 覺... (一百九十六) 逃去來至... 覺... (一百九十七) 逃去來至... 覺... (一百九十八) 逃去來至... 覺... (一百九十九) 逃去來至... 覺... (二百) 逃去來至... 覺...

頌經四律吉點





是れの願經四分律古點は、曩に成れる地藏十輪經元慶點、成實論天長點と共に、假名遣及假名字體沿革史料第二編の一部分と爲す。抑も此の經卷は、地藏十輪經に次いで例の如く、奈良帝室博物館修繕所に於いて、大正九年一月末より四月中旬までに、原本につきて研究せしところなれど、訓點年代の明かならざるを以て、其の後、成實論の天長五年の點なることを、其の第十卷の識語によりて知られたるより、暫く此の篇の印刷を措き、先づ取り敢へず、成實論の篇を印刷し、而して此の篇の假名字體を天長のものに比するに、殆ど同時代にして稍古きもの、如く見ゆるより、即て之に次いで斯くは印刷せるなり。さて此篇を印刷に附するに方り、前に成れる成實論天長點の白墨の傍訓を編者が讀みて墨書せる讀方に誤讀は他にも多かるべけれど、摘要三にストハとあるべきをスルトハとなせるが二處も見えたるが如き、小兒も敢てせざる過失をして自ら覺えず、忽ち一二學友に詰責せられて呆然たるものあるは、身は既に老せるをも忘れて自ら恃めるが致すものにてあらんか。既に一びきることありしにも懲りもせて、此の篇も亦自ら淨書し、校正をも爲せるものは、是れ餘儀なき事情に強ひられたるなり。そは此の篇の淨寫校正は、曾て十輪經元慶點を淨寫せる奈良帝室博物館技手大宮武磨ぬしに依頼し置けるに、折悪しくも病痾の爲めに辭して原稿を返却せられしこと是なり。されども幸ひに、忘年の友奈良女子高等師範學校教授文學士春日政治ぬし、編者が窮せるを感み、編者が淨寫せるものに對し、極めて懇篤に、一々癭疵の在るところを指摘したれば、大に心を安んじて、直ちに印刷に附するを得るに至れるなり。而も尙ほ大方の識者に許されざるもの多々あるべしといへども、唯是等を顧慮するが爲めに、抄録せる古語古訓を空しく棄捨して息むべきにあらず。幸ひに啓明會の補助ありて我が意に任せて印刷するこゝとを得たるは、國語の爲め、歡喜するところなり。

大正十一年八月 日

終

